# 救出劇 一筋の光

## 津波研究者 九死に一生

### 大船渡の山下さん 「想像を超えていた」

### 病床で被災 首まで漬かる 防災検証訴える

「津波防災の在り方を検証してほしい」とベッドから訴える山下文男さん＝16日、花巻市東和町の県立東和病院

「想像をはるかに超えていた。津波を甘く見ちゃいけない…」。大船渡市三陸町綾里の津波災害史研究者、山下文男さん(87)は陸前高田市の県立高田病院に入院中に津波に遭い、首まで水に漬かりながらも奇跡的に助かった。これまで津波の恐ろしさを伝えてきた山下さんですら、その壮絶な威力を前に言葉を失った。「全世界の英知を結集して津波防災を検証してほしい」。声を振り絞るように訴えた。

「津波が来るぞー」。院内に叫び声が響く中、山下さんは「研究者として見届けたい」と4階の海側の病室でベッドに横になりながら海を見つめていた。

これまでの歴史でも同市は比較的津波被害が少ない。「ここなら安全と思っていたのだが」

家屋に車、そして人と全てをのみ込みながら迫る津波。映像で何度も見たインドネシアのスマトラ沖地震津波と同じだった。

ドドーン―。ごう音とともに3階に波がぶつかると、ガラスをぶち破り一気に4階に駆け上がってきた。波にのまれ2㍍近く室内の水位が上がる中、カーテンに必死でしがみつき、首だけをやっと出した。10分以上しがみついていると、またもごう音とともに波が引き、何とか助かった。

海上自衛隊のヘリコプターに救出されたのは翌12日。衰弱はしているが、けがはなく、花巻市の県立東和病院に移送された。後で聞くと患者51人のうち15人は亡くなっていた。

「こう話していると生きている実感が湧いてくる」と山下さんは目に涙をためる。「津波は怖い。本当に『津波てんでんこ』だ」

「てんでんこ」とは「てんでんばらばらに」の意味。人に構わず必死で逃げろ―と山下さんが何度も訴え全国的に広まった言葉だ。

9歳だった1933（昭和8）年、昭和三陸大津波を経験したが「今回ははるかに大きい。津波防災で検討すべき課題はたくさんある」と語る。特に、もろくも崩れた大船渡市の湾口防波堤について「海を汚染するだけで、いざというときに役に立たないことが証明された」と主張する。

同市の湾口防波堤は60年のチリ地震津波での大被害を受けて数年後に国内で初めて造られた。「津波はめったに来ないから軽視されるが、いざ来ると慌てて対応する。それではいけない。世界の研究者でじっくり津波防災の在り方を検証すべきだ」と提言する。その上で「ハード整備には限界がある。義務教育の中に盛り込むなど不断の防災教育が絶対に必要だ」とも語る。

1896（明治29）年の明治三陸大津波で祖母を失った。今回の津波で綾里の自宅は半壊。連絡は取れていないが、妻タキさん(87)は無事だった。「復興に向けて立ち上がってほしい」。最後の言葉に将来への希望を託した。

津波にのみ込まれ、長男の誠一さんらに救助された宇都宮一子さん。「助かったのが不思議に思える」と振り返る＝16日午前11時39分、宮古市・赤前小（宮古支局・熊谷真也撮影）

### 宮古・宇都宮さん親子

## 息子命懸け 母救う

### 濁流に飛び込み励ます

もう少しで助けが来るぞ、頑張れ―。宮古市赤前の宇都宮一子さん(70)は、11日の大津波にのまれ、流木などにつかまりながら浮いているところを長男の会社員誠一さん(48)や消防団員らに救助された。誠一さんは濁流に流される一子さんの声を聞いて水中に飛び込み、一緒に漂いながら母親を励ました。一子さんは16日、県立宮古病院を退院し、赤前小の避難所に入った。

地震の際は自宅にいた一子さん。ラジオだけを抱えて避難したが、高台まであと200㍍ほどの所で、津波にのみ込まれた。

「後ろを振り向くとガーっとすごい速さで波が上がってきた。波に足をとられ、のみ込まれた」。足が底に付かない深さの中、「まだ死んでいられない」と懸命に泳ぎ、水面に顔を出したが、周りはがれきだらけ。流れてきたドア板や流木につかまり、助けを求めて叫んだ。

市消防団員の誠一さんは取り残された人の救助活動に当たっていたが、声を聞き、一子さんだと気付いた。はんてんをぬいで、海に飛び込んだ。沈まないよう両脇に流木を抱えて泳ぐ。何とか母親の所までたどり着くと、ドア板の上に一子さんを上げた。

「あと少しで助けに来る人があるから」と懸命に励ます誠一さんに、一子さんは「迷惑掛けて、ごめんなあ」と声を掛けた。一子さんは1時間ほど水に漬かり体は冷え、気を失い、その後の記憶はないという。ボートもなく2人の救助は難航したが、暗くなりかけたころ、消防団員や近隣住民が近くから持ってきた浴槽を浮かべ、2人を救助した。

誠一さんは「自分の親。助けに行って駄目なら、一緒に死んでもいいと思った」という。一度、宮古病院に運ばれたが14日から消防団活動を再開した。

## 県立大後期試験取りやめ

### 入学式は岩手大も中止

県立大は16日、延期して24日に実施するとしていた一般選抜後期日程を中止し、大学入試センター試験の得点と出願書類により合否判定することを発表した。岩手大と県立大は、それぞれ4月上旬に予定していた入学式の中止を決めた。

県立大の一般選抜後期日程は12、13の両日を延期し、24日に実施する予定だったが、東日本大震災の被害などを考慮、受験機会の公平性の観点から中止する。志願者は4学部合わせて957人。大学入試センター試験の得点と出願書類で合否を判定する。合格発表は26日午後3時で、入学手続きは27日から31日まで。

同大の入学式は4月5日を予定していたが中止。2011年度の前期授業開始日は今後調整する。

岩手大は4月7日の入学式を中止する。今後、後日開催を含めて対応を検討する。11年度の前期授業開始日は4月12日から5月9日に変更する。

両大ともに卒業式、学位記授与式の中止も決めており、学位記は学生の状況に応じて、各学校で授与するか郵送する。

## 母の顔、せめてもう一度

### 津波から生還の山根さん（宮古商高）

### 隣で被災、涙こらえ捜索

「せめてもう一度顔を見たい」と話す山根りんさん

学校からの帰宅途中、津波に流されながらも奇跡的に命をとりとめた宮古商業高校1年生の山根りんさん(16)は、宮古市内の遺体安置所で母親を捜した。一緒に津波にのまれた母。もう生きていないかもしれない。

「せめてもう一度顔を見たい」と声を詰まらせた。

大地震の瞬間、学校まで迎えに来た母親が隣にいた。宮古湾沿いに立つ温泉宿泊施設近くのコンビニエンスストアに立ち寄ったところで、津波に襲われた。母親とともに走って高台に逃げたが、押し寄せるたびに高さを増す津波は堤防を乗り越え、背後から迫る。

「海の中でもみくちゃになって息もできなかった。もう駄目だと思った」。うねる水面から顔を出すと、辺り一面何も見えない。付近の集落から流された家屋の屋根にはい上がると、唯一残った温泉宿泊施設の屋上で、逃げ遅れた従業員の叫び声が聞こえた。

「こっちさこ（こっちへ来い）。がんばれ」。泳いでたどり着ける距離ではなかったが、しがみついた屋根が流されて宿泊施設にぶつかったはずみで、ガラスの割れた窓から屋内に飛び込み、上の階に駆け上がった。

屋上にいて声を掛け続けた温泉施設の支配人佐藤光伸さん(62)は「助かったのは奇跡としか言いようがない」。寒さに震える山根さんに逃げ遅れた宿泊客が着替えを差し出し、毛布を集めて暖を取った。かすり傷程度で済んだが、隣にいたはずの母親の姿はない。

父親と一緒に出向いた遺体安置所で母親を見つけることはできなかった。「泥の中にいるのかもしれないけど、捜さないと」。16歳の女子高生は気丈に振る舞った。

## 悲しみ秘め陣頭指揮

### 陸前高田 戸羽市長 妻不明、支援に全力

地震で妻が行方不明の中、被災者を支援する戸羽太市長＝陸前高田市

「逃げろ！逃げろ！」。防災行政無線で市職員が絶叫した直後、市庁舎3階まで津波が流れ込んだ。市全域が壊滅した陸前高田市。戸羽太市長(46)は妻が行方不明のままだ。涙を浮かべながら「ゼロどころか、マイナス100からの出発。今は避難者約9千人の支援に全力を挙げたい」。対応を陣頭指揮している。

地震は市長室での執務中に起きた。テレビで緊急地震速報が流れた直後、棚が倒れるほどの揺れに襲われた。全員が庁舎の外に出たが、双眼鏡で海を観察していた職員が、防波堤を大きく越える波を発見。職員が無線で市民に避難を呼び掛け、自分も庁舎屋上に駆け上った。

庁舎は一部4階建て。3階の屋上に約120人が避難した。津波はすぐに3階を越え、2㍍下まで迫った。

「もう終わった」。屋上から見た光景は絶望的だった。木造民家は次々にのまれた。避難者がいたはずの市立体育館も、激流で壁がなくなった。

津波は何度も押し寄せた。日が暮れて暗くなっても助けは来ない。水浸しの4階の部屋で約120人と夜を明かした。翌朝、午前6時。「助けは来ない」と判断した。被害を受けていない市立学校給食センターまで幹部職員らと歩き、災害対策本部を立ち上げた。

自宅は被害がひどい高田地区にあり、息子2人は避難して無事だったが、妻の久美さん(38)は近くの住民らと高台に避難する途中で行方不明になった。トラックで避難した工事業者が「奥さんを乗せてあげればよかった」と謝ったという。

停電の上、携帯電話も通じず、対策本部で着の身着のまま、消防や自衛隊との調整に当たる。作業服の下のシャツは汚れ、うっすらと無精ひげも。宿泊は本部2階の一室。職員らと雑魚寝だ。

行方不明になったり、家や家族を失ったりした職員も多い。津波が来る直前、足が不自由なお年寄りを市庁舎に避難させようとして、行方不明になった職員の姿が今も目に焼き付いている。

市議や副市長を経て2月に初当選したばかり。「ありえない災害。今は先のことを考えるより避難者のことが大切。水や燃料、粉ミルクが絶対的に足りない。全国にお願いしたい」。支援を強く訴えた。

## 信じた古老の言葉

### 野田「逃げろ」守り助かる

「着の身着のまま逃げろ。物を取りに戻ったらもう駄目だ」

今は102歳になったおじいさんに子どものころから言われていた言葉が震災直後、孫たちの頭にすぐ浮かんだ。津波で300～400戸が流された野田村。太平洋に面し、明治以来、何度も津波に襲われた町で、助かったのは古老の教えを守った人たちだった。

着飾った幼児の写真、掛け算のドリル、絵本…。泥にまみれて親子の日常が散らばる。家の屋根が数百㍍も押し流されて重なり、生活は根こそぎ奪われた。

「津波が来たらとにかく逃げろ、って昔からいう」。村では誰もが口々にそう話す。

祖父と同居する男性は村内にある職場から車を飛ばして帰宅。海を見ると、6㍍の防波堤を乗り越え、襲いかかる波頭が見えた。慌てて祖父を車に乗せて高台に逃げ、ほっとひと息ついた。

「あの言葉に祖父自身も自分も命を救われた」

泥まみれになった村内の親類の家を片付けながら、男性は話した。

「すごい津波だったけど、浜のそばの人はかなり逃げて助かった」

もう一人の孫で、一緒に片付けていた40代の女性も口にした。

「神社へ逃げろ」が村人の合言葉。高台の愛宕神社が避難場所だ。

## 県立学校3月中授業打ち切り

### 宮城、入学式も延期

宮城県教育委員会は16日、東日本大震災を受け、すべての県立学校の3月中の授業を打ち切ると発表した。4月上旬に予定していた入学式や始業式も4月下旬に延期する方針。

県教委によると、例年は24日ごろまで授業を行うが、大半の交通機関がまひしている現状で生徒を通学させるのは不可能と判断した。

県内では多くの学校が避難所として使われている。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。